

### ◆③サンキタ広場

広場のオブジェは、高橋工業という気仙沼の金属加工会社で、造船の技術を使って作っています。大変だったのは、勾配がついており基礎が出てくることから、1cm刻みでコンタをきり、それに合わせて基礎が出ないような設計をしました。強化コンクリートには、鉄筋が入っており、鉄筋とアルミが電蝕を起こすので、電蝕しない塗装を鋼材に塗っています。

デザイン照明の半分からは、銀色にしてるのも意味があって、最初は白にしていたんですが、光が入ったときの反射の仕方を考え銀色に変えました。車道の交差点照度が一番問題になって、均齊度が取れなく、それが一番苦労しました。

### ◆④サンキタ通り

車道の幅員を4mに縮め、南側の歩道を1.5m広げました。歩車道境界の段差があったので、それを全部フラットにしています。フラットにすることで歩車道の境界が不明確だという指摘があったので、舗装の色を変えたりしています。

舗装はアクセントカラーも含め御影石を使っています。車道は車の乗り入れができて割れやすいので、インジェクト工法という特殊な工法を採用しています。舗装パターンは、対象の色を現地に並べて置いて、先の場所に施工するというやり方を徹底しました。割付図は、小さい石も描いていて、施工レベルであっています。阪急の駅の出入口には以前階段があったので、この舗装と同じレベルで駅の改札側に押し込んでもらって、広く見えるような工夫をしています。

照明柱は、「光林」という概念で、歩車共存道路が、それなりに蛇行しているので、その蛇行を活用し、同じ緑石からの距離を統一せずに、後ろ75cmの幅で左右にフレキシブルにずらしています。色温度は偶然にもこの阪急の下側のお店も全部、3000Kで統一されているので、夜になって歩いてもらうと、違和感のない景観ができています。

### ◆⑤パークレット

神戸市では、三宮と元町駅間の回遊性を高めるべく、パークレットを三宮中央通りに配置しました。車道の交通量を抑えつつ、歩道の回遊性を高め、向かいの店も自由に使いやすいようにルールを定めています。歩道だけでなく車道の停車帯に張り出すことで、植栽空間などを確保しており、社会実験を経て作られた国内初の構造ということで市が宣伝していました。

上部の植栽を動かしたり、季節によって花を置き換えやすくしたり、イベントのときにパラソルを張ったりして、使いやすさも考慮し設計されています。

### ◆⑥三宮ブラッツ

三宮ブラッツという半地下広場で、元々は、ただの駐車場出入口という感じでしたが、美化した屋根をかけて、階段をテラス状に改良し、植栽を入れています。法的には道路ですが、活用に関しては事業者を公募し、そこで市が協定を結んで管理運営しています。神戸市は、混み合った市街地で、大きな広場を取れないことから、小さな広場をあちこちに展開しています。

プロポーザルで選ばれた建築事務所の設計で、遠くから見ても何か分かるシンボル性と、下から見たときの屋根の反射の面白さがデザインの特徴です。



▲サンキタ広場での事例見学



▲サンキタ通りでの事例見学



▲現地施工状況を舗装割付図で確認



▲車道の路側帯に張り出した構造



▲シンボル性と集いのある半地下広場

### 東遊園地の再整備計画について (㈱エス・イー・エヌ環境計画室 津田主税氏)

東遊園地再整備設計は、(㈱エス・イー・エヌ環境計画室、(株)公園マネジメント研究所、(株)空間創研の3社JVで応募させていただき、2023年度CLA賞を受賞しました。

この公園の再整備では、CLA賞や国土交通大臣賞も受賞しましたが、個人的に一番嬉しかったのはグッドデザイン賞です。多様な工業製品と並ぶ中、ランドスケープデザインによる公園再整備が評価されたことが非常に嬉しかったです。さらに、「市民有志が社会実験を重ねて市民の使いこなしと公園自体を育ててゆくなかで市の公園改修事業につながっていき、開園後の公園運営にも活かされていくプロセスを、現在のパブリック・パークのあり方として高く評価した」というコメントをいただいたことも嬉しかったです。



▲津田氏による東遊園地の概要説明

### ◆東遊園地の再整備と歴史的背景について

東遊園地の東側、敷地沿い南北の道路(フラワーロード)にはかつて旧生田川が流れており、東遊園地の西側には外国人が開港後に最初に住み始めた街である旧居留地がありました。旧生田川は天井川であり、旧居留地より東遊園地側の方が少し高くなっています。旧生田川による洪水害が多かったため、旧生田川は付替え工事で廃川になりました。その跡地を外国人の遊び場として、ちょうど150年前に「内外人遊園地」として開園されたのがこの公園です。

明治6年の太政官布達から2年後に開園した公園の1つでもあります。その後、居留地が日本に返還され、1922年に「東遊園地」へ改名されました。開園当時は野球やクリケット、サッカーなどに利用され、ここから全国へ展開されていったとも言われています。また、現在南側へ移設されている花時計は、日本で初めての花時計として知られています。

### ◆公園再整備の経緯について

震災復興が落ち着いた2010年以降、三ノ宮駅前周辺では「クロススクエア」と呼ばれるサンキタ広場やサンキタ通りの整備が進みました。湾岸側でも整備が進み、震災復興記念の「みなとの森公園」や「メリケンパーク」といった公園が点在しています。

三ノ宮駅と湾岸をつなぐフラワーロードの結節点にある東遊園地は、都心・三宮の再整備において特に重要な場所にあります。2015年から三宮界隈を美しく整えていく動きの中で、後ほど登壇される村上氏が「東遊園地を再整備すれば三宮全体がもっと良くなるのではないか」という思いを抱き、そのきっかけをつくりたいという考えから、再整備がスタートしました。

### ◆公園再整備と市民参加の社会実験について

大きな軸として行われたのは、社会実験「アーバンピクニック」です。これは、公園利用者の流れを検証するもので、芝生広場の芝生化実験も行っています。

神戸市も協働する形で、再整備検討委員会やアドバイザリーミーティング(学識経験者や近隣の協議会の関係者を巻き込んだ会議)を通じて、2015年春に社会実験が開始されました。最初は20m四方程度の芝生が張られました。春が好評で秋にも開催し、市民からの公募プログラムも展開されました。

2年目は神戸市が社会実験として土のグラウンドを芝生化して、利用者の活動について調査しました。さらに、市民がこの芝生広場でやりたいプログラムを公募し、実行しました。アーバンピクニック側ではディスカッションする場を提供しつつ、さまざまなプログラムが企画されました。

3年目の2017年には、パビリオンと呼ばれる仮設建築物を年々展開し、公園に最適な芝生の再生もプログラム化し、神戸市の職員の方と一緒に検討しました。

### ◆公園の社会実験とその成果について

芝生化実験では、ノシバ、ティフトン芝、エルトロ芝を用い、基盤材も保護材や土壌改良材を変えながら試験を実施しました。この広場は震災復興イベント「神戸ルミナリエ」で多くの人が通行するため、芝生がすぐ地下茎だけになってしまう状況でした。そのため、回復力の高いティフトン芝を中心に、冬芝の種も撒くことで一年を通して緑を楽しめる設計としています。また、なぜこのような芝生管理を行っているのか、市民に理解してもらえよう解説板も設置され、丁寧に事業が進められました。

再整備の基本計画では、次の3つのコンセプトが掲げられています。①人が主役の公園、②神戸らしさが光る公園、③しなやかな公園。これは、神戸のシビックプライドの象徴として、「神戸の魅力は人である」という考え方に基づいています。

公園内では、「Living Nature Kobe」というコンセプトのもと、自然とともに暮らす都市・神戸を目指しています。その一環として、宿根草を使った自然な風景のある植栽「Naturalistic Landscaping」が公園内の3ヶ所に展開されています。水景の背面や西南角の階段周りには神戸市造園協力がデザイン・ビルドで提案された花壇もあります。「ポランティアガーデン」と呼ばれるエリアでは、「GREEN COMMONS」というP-PFI事業者のガーデナーが市民とともに宿根草ガーデンを作っています。いずれも新しい植栽風景として公園に彩りを加えています。

また、公園を通じて地域社会を活性化するため、公園が良くなれば街全体も良くなるというコンセプトで運営されています。公園内で行われるイベントに加え、パークトークや専門家を招いた講演会も開催され、公園をベースに街全体をどう改善していくかを議論する場も提供されています。

### ◆最後に、公園に思うこと

私はこの東遊園地の再整備にも今も関わらせていただいているのですが、いくつか感じていることがあります。まず一つ目は、多様な社会実験を開催し、街全体の流れの中で東遊園地をどう活かすかをうまくプロデュースされた神戸市の手腕です。二つ目は、公園を使いこなすプレーヤーがいることです。アーバンピクニックを運営する方々や参加者、あるいは自分のアイデアでイベントを行うプレーヤーが存在し、彼らが活動したいと思える器が整っていることが大きいと感じます。三つ目は、公園が周辺の街に開かれ、街全体とつながることで、自分の街を好きになり誇りを持つきっかけになるということです。街を愛する気持ちは、公園にも関わりたいという意欲につながり、その結果、心も体もウェルビーイングに寄与するのではないかと実感しています。実際、このような流れが現場でも生まれていると感じます。

### (一社)リパルシテイニシアチブ代表理事 村上豪英氏との意見交換会

東遊園地の運営に関わっている村上と申します。現在、家業の建築業を営む村上工務店の社長を務めています。社会実験を始めた時は、ポランティアのような形で始めました。この賑わい拠点施設「URBAN PICNIC」を所有しているのは村上工務店で、ここを借りて運営しているのは、私が代表理事を務めている(一社)リパルシテイニシアチブという団体になります。



▲村上氏との意見交換会

### Q:社会実験に至った経緯についてお聞かせください。

私は神戸の街のことが好きです。阪神淡路大震災に被災したときは大学生で、とても悲しい思いをしました。その思いを抱き続けてきたにも関わらず、2011年の東日本大震災までの16年間、何もしてこなかった自分にショックを受けました。それがきっかけとなり、2011年に「神戸モトマチ大学」という勉強会を始めました。少しでも人と人がつながることで、神戸の街が良くなってほしいという思いから始めたのです。そうした活動の中で、神戸市役所の方と出会う機会が増えました。当時、市が都心の再生に向けて街の人たちからアイデアを集めていた時期でした。2014年頃、私も意見を求められました。その際、私は「神戸市役所の隣にあり、神戸にとって大切な公園が放置されている。ここを変えれば、都心は大きく変わるのではないか」と提案しました。公園の可能性を確かめるために、みんなで見る「実験」が必要だと感じていました。誰かがやってくれるだろうとは思わず、自分も汗をかき一人になろうと考えるようになったのが、アーバンピクニックという社会実験です。

### Q:社会実験で作られた風景を見てどう感じられましたか。また、その次へと繋がっていく過程でも紹介いただきたいです。

当初、神戸市の公園部では社会実験に対して懐疑的でした。社会実験をしてよかったことは、実際に空間を作り、色々な人が集まる風景を公園部の方々と一緒に見てくださったということです。「こんなに風景が変わるのか」、「人がこうやって来るんだ」ということを感じてもらえ、神戸市の方から「来年以降も一緒にやろう」と言ってくれたことが大きな成果でした。

### Q:運営にあたっての苦労話をお聞かせください。

社会実験は平日もしていたのですが、皆さん平日にもやっているとは思っておられませんでした。私達は、平日も続けることで、公園に何を仕掛けたら何が返ってくるのか、どんな風景が望ましいのか、何をすればクリームが出るのかということを観察し続けることが、この公園での本格的なリニューアル計画に生きるはずだと考えていました。

### Q:Park-PFI事業者として関わると決断された際の思いをお聞かせいただけますか。

社会実験での経験がリニューアルに活かされるとよいと思っていました。当時考えていたのは、「神戸市民にとって大切な公園に、インターナショナルブランドのカフェが来るのは少し違うのではないか」ということでした。当初は格好いいカフェが来たらいいのではないかなぐらいに思っていました。そう思っていたのですが、長くて過ぎていくうちに、例えばコンビニでビールを買ってきて気持ちよさそうに芝生で飲んでいるような人たちは、カフェの経営者にとって好ましい存在なのかなと疑問が湧いてきたんです。あるいは、中学生が裸足で駆け回っていたり、おじいさんおばあさんが夜にワインを飲みながらお話しをしていたりといった風景を見て、「これこそ公園の醍醐味だな」、「誰にでも開かれている場ってこういうことだよな」と感じました。一般的なカフェはターゲット層を絞って運営されますが、ユニバーサルに開かれた公園の素晴らしさを目指すという方向性とは少し違うなと思いました。カフェの経営者とうまく方向を修正しながら、公園の最適解を目指していくためには、カフェに任せきりにするのではなく、その間に立つ存在が必要なんだと感じ始めました。そこで、自分達が手を挙げて、その補助線になるべきではないかと考えたのが最初です。



▲賑わい拠点施設「URBAN PICNIC」

### Q:開園後、何か想定されていたイメージと違ったことはありますか。

開園直後から、想像をはるかに超える人が来られました。都心に来た方が公園で一息つくような使い方を主に想定していたのですが、明らかに家を出たときからこの公園を目的地としているような方々もいらっしゃいました。開園から数年経った今でも、季節のよい時期にはそうした方々はいらっしゃいます。人がここで気持ちよく過ごされている風景が、他の人にとっての魅力になるという状況を一番つくりたかったので、それは想像以上にできたと思っています。

その風景というのは、普段から気を付けていないとできないことだと思います。例えば、イベント開催の希望をすべて受け入れていると、季節のよい時期の土日がずっとイベントで埋まってしまうようなことになるので、開催頻度はコントロールするようにしています。色んなイベント企画が持ち込まれます。私達は管理者ではないので最終決定できないのですが、神戸市における前の一時許可判断みたいなことをしています。その際、特定の人しか入れないものや、最初からないと楽しいもの、近くに寄らないと何をしているかわからないようなものは難しいと考えています。それを公園でやる意味があるかどうかということを意識しています。

### Q:リニューアルの工事期間中は情報発信などされていましたか。

工事期間でもできることは探していました。例えば当時、神戸市が「Naturalistic Landscaping」を広めようとしていた時期で、東遊園地の横の歩道で宿根草を活用した花壇を市民とつくり育てる取り組みをしました。そのとき育てた宿根草は園内の植栽にも活用していて、公園と人の接点が繋がるようにしました。その他にも、この公園で展開するイスのコンペをしたり、公園で伐採された木を使ってイスの座面を作るワークショップを開いたりしました。社会実験のときに皆さんとても楽しんでいたので、戻ってきたというより、リニューアルオープンを待ち望んでおられたように思います。

### Q:建築や地域振興に関する知識があつて実践がはじまったのか、あるいは市民として燃えてきて関わるようになったのでしょうか。

家業が建築でしたが、学生の時は生態学を学んでいました。阪神淡路大震災をきっかけに、建築や街のことに関心を持ち始めました。色々な体験をするうちに、「何をしたら街にとってよいのか」ということを考えるようになりました。私が他に関わっている「NATURE STUDIO (ネイチャースタジオ)」でも東遊園地でもそうですが、このエリアがどう変わると一番よいかを考えたらうで、エリアを後押しするようにその場所を使えないかと考えています。東遊園地でも、神戸の都心が変わっていくためには、この公園をどう使えるのだろうかということを考えています。

私の大きな思いとして2つあります。1つは、収益をあげながら社会に貢献することができることにチャレンジしたいということ。もう1つは、東京と一部の街以外はこれからお先真っ暗右肩下がりというような論調に対して、頑張れば反転できるような未来を模索していきたいということです。神戸以外でも、そうした思いを持つ方々と色々な経験を共有できるような未来をつくりたいと思っています。